

中世と近世におけるVカカルとVカケルの始動用法 —語彙的アスペクト複合動詞と構文ネットワークの観点から

菊田 千春

1. はじめに

本稿の目的は複合動詞VカカルとVカケルの始動用法の成立とその後の展開について、特に中世および近世の様子を実証的に明らかにすることを通し、自他対応する動詞を含むこの両者が文法化の過程でどのように関係しあったかを構文ネットワークによってモデル化することである。現代日本語において、複合動詞VカカルとVカケルはいずれもが「～し始める・～しそうになる」という始動用法を持つが、姫野 (1999) が指摘するように、両者には生産性において強い非対称性が観察される。この始動用法は文法化を通して成立したと考えられるが、『日本国語大辞典』の用例によると、生産性の低いVカカルの始動用法が観察される方がずっと早く、この非対称性は単に文法化が始まった順序を反映しているというわけではなさそうである。¹

そもそもカカルとカケルのような自他対応する動詞を含む複合動詞のいずれもが文法化によってアスペクト的な意味を持つ例は稀であり、その成立の過程は理論的にも興味深い。用法基盤モデル (usage-based models) では、それぞれの文脈で用いられる具体的な語彙や表現が生み出す解釈の揺れや推意が次第にボトムアップ的に変化へと繋がっていくとされるが (Traugott & Dasher, 2005; Bybee, 2010 他)、その際、自他対応などの文法的な体系知識はどのように意識され、言語変化に影響を与えるのだろうか。そのような問題意識に立ち、菊田 (2008) はVカカルとVカケルの始動用法の成立につい

て、実証的データを踏まえて分析している。そして、Vカカルの始動用法は中古の頃、メトニミー的な解釈の揺れを含む事例から、主観化 (Traugott & Dasher, 2005) により、時間をかけてボトムアップ的に成立したが、Vカケルの始動用法は先に確立したVカカルの影響を受けて成立し、近世にそのVカカルの凌駕したと主張した。しかし、この分析はVカケルの成立過程に不明な点が残りと、また、近世についての主張は推測に留まっている。

そこで、本稿では中世と近世に焦点を絞り、VカカルとVカケルの関係をより詳細に考察する。その際、影山 (2013) が新たに提案する複合動詞の3分類を取り入れ、他動性調和の原則を手がかりに分析する。そして、VカカルやVカケルの当該構造を「始動構文」と捉えた上で、それぞれの関係について、構文ネットワークの分析を提案する。VカカルとVカケルの変化はこれまで文法化という観点で論じられてきた。確かにそれぞれの通時的な成立過程は文法化現象と考えることができるが、文法化のモデルではその両者の関係をとらえる次元をもたない。そこで本稿では「構文」という概念を導入することで、この問題を捉えることにする

本稿が主張・提案するのは以下の点である。まず、(1) 影山 (2012, 2013) の複合動詞の3分類は通時的な現象の説明に有効で、近世までのVカカル/Vカケルは語彙的アспект複合動詞と考えられるが、この範疇はさらに細かな連続性を持ったものとして捉える必要があること。そして、(2) VカカルとVカケルの関係には2つの段階があったことを示す。まず、中世において、他動性調和の原則を守りながらVカカルからVカケルへの拡大が進んだ段階である。一方、近世の段階では、両者の用法がさらに近づくという、De Smet et al. (2018) が主張する「誘引」の関係が見られた。(3) 最後に、通時的構文文法の視点から、このような中世と近世に見られる関係は、構文のネットワークの中で、VカカルとVカケルや上位レベルの構文がどのように関係づけられ、また、どれが強く認識される状態にあったかを反映すると考え、これをモデル化する。

本稿の構成は以下の通りである。第2節では、VカカルとVカケルの始動用法の展開とその記述的・理論的問題を先行研究を元に整理する。第3節では、影山 (2012, 2013) の複合動詞の分類法と他動性調和の原則の概要を述べる。そして第4節では、VカカルとVカケルの始動用法の関係について、中世および近世のデータを調査し、再検討する。特に断らない限り、通時的なデータの調査は菊田 (2008) と同様、国文学研究資料館の「日本古典文学大系本文データベース」と「断本大系本文データベース」(近世)を用いる。² 第5節では、第4節で明らかにしたVカカルとVカケルの関係を構文ネットワークの視点から論じる。第6節は結語である。なお、本文中では、複合動詞の前項動詞をV1、後項動詞をV2と呼ぶことにする。³

2. VカカルとVカケルの始動用法の展開と

その記述的・理論的問題：先行研究を手がかりに

2.1 現代日本語におけるVカカルとVカケルの共時的特性

複合動詞VカカルとVカケルは多くの意味用法をもつが、複合動詞の共時的な様相を網羅的に整理し分析した姫野 (1999) は、それを「指向」と「始動」に大別している。そして前者はさらに落下接触、依拠接触、志向接触、通過遭遇などの意味タイプに分けられる。指向のVカカルとVカケルの例を姫野 (1999) からそれぞれいくつか (1) と (2) に示す。

- (1) 散りカカル (落下接触)、通りカカル (通過遭遇)
- (2) 立てカケル (依拠接触)、詰めカケル (志向移動)

このような「指向」用法の場合、イディオム化の程度の違いはあるが、おおよそ「V1して、カカル／カケル」のように、動詞カカル・カケルの語彙的な意味が多かれ少なかれ反映される。⁴

一方、本稿が問題とする始動の例は (3) や (4) のようなものである (いずれも姫野 (1999) より)。

(3) 溺れカカル、発見されカカル

(4) つまづきカケル、忘れカケル

これらはいずれも「V1し始める、しそうになる」というアスペク的な意味を表す。⁵ つまり、始動用法の場合は動詞カカル・カケルの語彙的意味が複合動詞に直接反映されない。

この「指向」と「始動」の2種類は、従来から別のタイプの複合動詞として区別されてきた。影山 (1993) のモデルでは、複合動詞を「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」の2つに分類する。「語彙」「統語」という区別は文の派生において複合動詞がどの部門で作られるかということであるが、それは同時に統語構造の違いを意味する。たとえば、「押し寄せる」や「飛び出す」などの語彙的複合動詞は、語彙レベルでV1とV2が直接、ひとまとまりに結合していると考えられるのに対し、「歩き続ける」や「読み終える」などの統語的複合動詞は語彙レベルでV1とV2が結合しているわけではなく、統語構造上で、V2がV1を主要部とする動詞句を補文としてとると考えられている。

この結合部門の違いは複合動詞の生産性や意味などの違いも含意する。たとえば、語彙的複合動詞の結合の可能性や全体としての意味はそれぞれの語彙の意味に依存し、規則性がない。これに対し、統語的複合動詞はV2の意味は一定であり、ある程度の制約はあっても、高い生産性を持ち、多くのV1と結合するとされている。また、意味については、語彙的複合動詞が具体的な行為や出来事の主題関係に直接関わる意味を表すのに対し、統語的複合動詞はモダリティなどを含む、広い意味でのアスペク的な意味を表すとされる。そして、前者よりも後者の方が「文法的」な意味であるとすれば、

後者は文法化の結果、生まれたと考えることができる (Hopper & Traugott, 2003)。

さらに2種類の複合動詞は、他動性調和の原則 (Transitivity Harmony Principle) (影山, 1993) に対しても違いを示す。影山によれば、他動性調和の原則とは、語彙的複合動詞の形成において、構成素となる動詞のいずれかが他動詞または非能格動詞であれば、もう一方の動詞が非対格動詞にはならないという原則である。これについて、影山 (2013) は、「要するに「2つの動詞を複合する際、首尾一貫した1つの事象を作り上げるためには、一人の同じ動作主が関わっていないなければならない」という、事象合成の機能的な原則である」(影山, 2013, p. 37) と述べ、その機能を「動作主共有 (agent sharing)」(影山, 2013, p. 38) と呼んでいる。

他動性調和の原則は、語彙的複合動詞のみに適用される特性の1つとされてきた。たとえば (5) が示すように、他動性調和の原則に適合した語彙的複合動詞は可能だが、適合しない組み合わせでは適切な語彙的複合動詞が形成されない ((5) は影山 (1993) より)。

- (5) a. 突き落とす (他+他) *突き落ちる (他+非対格)
 b. 焼け落ちる (非対格+非対格) *焼け落とす (非対格+他)

ただし、他動性調和の原則は、傾向を捉えた一般化で、違反事例がないわけではない。⁶

VカカルとVカケルの場合、(1)-(2) の指向用法は語彙的複合動詞の特徴を持つ一方、(3)-(4) の始動用法は統語的複合動詞の特徴を持つ。ただし、この両者には生産性の違いがある。すなわち、姫野 (1999) が述べるように、Vカカルで表現できるものはすべてVカケルで表現できるが、その逆は成立たないという関係がある (姫野, 1999, p. 122)。つまり、(6) に挙げた姫野の例が示すように、Vカカルは意思的な行為を表す他動詞や非能格動詞のV1とは結び

つきにくい傾向があるが、Vカケルはそのような制約をほとんど持たない。

- (6) a. 死にカカル 死にカケル
 b. ?読みカカル 読みカケル

このように、現代日本語のVカカルとVカケルはいずれもが始動用法を持つものの、生産性の高さ、すなわち結合するV1に対する自由度という点で強い非対称性が観察される。そのため影山(1993)はVカケルを統語的複合動詞の1つとする一方、Vカカルについては明確にしている。それに対し、姫野(1999)はいくつかの統語テストを元に、VカカルもVカケルと同じ統語特性を示すので、統語的複合動詞と考えてよいとしている。

2.2 VカカルとVカケルの通時的特性

上述のようにVカカルとVカケルの始動用法が文法化の結果であるならば、その生産性の違いは文法化の進度の差と考えることができる。とすれば、Vカカルの始動用法の成立はVカケルに遅れをとったのではないかと思われるかもしれない。しかし、事実はその逆で、始動用法と解釈されるVカカルの事例は中古のころより観察されるのに対し、Vカケルの始動用法は中世まではほとんど見られない。その通時的な展開の概略を菊田(2008)を元に確認しておこう。

中古の主な文献に観察される複合動詞を網羅的にまとめた東辻他(2003)によれば、姫野(1999)が整理した現代日本語のVカカルの指向用法はすべての種類が中古にすでに観察される。その主なものを(7)に挙げる。

- (7) 「落ちカカル」「傾きカカル」「降りカカル」「暮れカカル」「寄りカカル」
 「言カカル」「食ひカカル」「押しカカル」「行きカカル」「来カカル」

しかし、これらのVカカルの用例の中には、始動用法の解釈が可能なものはいくつかある。たとえば『日本国語大辞典』は(8)の「暮れカカル」と「来カカル」を始動用法の例として挙げている。

- (8) a. 母北の方、異兄弟たち、ただ爰になん来かかる 「落窪物語」(10C後)
 b. 日暮れかかるほどに 「源氏物語」(1001-14)

これらはそれぞれ「通過接触」や「落下接触」という指向用法として解釈できるが、同時に始動用法としての解釈も可能である。中でも、中古の文献には「(日が)暮れかかる」という表現が頻繁に見られ、日が傾き始めたころからすっかり日が沈むまでの夕暮の時間帯を表す表現として多用されていたことが窺われる。菊田(2008)は、「暮れカカル」が落下接触の意味を持ち、日が暮れて、その結果、太陽が低くかかる(あるいは闇がかかる)という意味であったものが、メトニミー的なプロファイルシフトによって、その夕暮れが始まる部分を指す解釈が生まれ、これが多用される中で、始動用法と再分析されるようになったのではないかと考えている。

しかし、始動解釈の可能な例が生まれても、この用法は他のV1にはなかなか広がらず、「日暮れかかる」などの決まった表現にしか見られない状態が長く続く。それでもやがて中世に近づくにつれ、始動のVカカルの生産力が少しずつ増し、V1の種類が増え、指向用法との曖昧性のない、確実に始動用法と思われる例が見られるようになった。以下が中世の例である。

- (9) a. 馬より逆さに落ちかかりたれども、矢に荷われて「保元物語」(1318)
 b. 消えかゝる露の命のはては見つ 「増鏡」(1375)

一方、Vカケルについてはどうだろうか。東辻他(2003)によれば、Vカケルの場合も現代に見られる指向用法のほとんどがすでに中古に観察される

が、Vカケルとは異なり、中古のVカケルには始動用法と解釈されるような事例は見いだせない。⁷ (10) に中古のVカケルの例を示す。なお、古語ではカケルは下二段活用のため、終止形は「カク」であるが、わかりやすくするため、本稿では、以下、すべて現代語と同じ「カケル」で統一する。

- (10) 「落としカケル」「脱ぎカケル」「投げカケル」「振りカケル」「引きカケル」
「寄せカケル」

ただ、中古の後半以降、Vカケルに心理的志向を表す用法が増えることが注目される。たとえば「待ちカケル」は相手に注意を向けて待つこと、待ち構えることを表す。この複合動詞自体は中古から見られるが、軍記物というジャンルの影響もあるのか、中世の文献に非常に多い。⁸ 「待ちカケル」は、すでに待っている時の心的態度なので、「待とうとする」という始動との間には乖離がある。しかし、対象に意識を向けて待ち構えることは意図的な行動を起こす準備段階のこともあるため、始動用法へとつながった可能性があるのではないかと菊田(2008)は推測している。たとえば、(11)の「抜きカケル」は始動解釈が可能と思われるが、元々、相手に斬りかかるつもりで刀を抜いて身構えるという心理的志向の用法から始動へと繋がった可能性を指摘する。

- (11) 伊東重代の赤銅づくりの太刀を二三寸ぬきかけ 片膝おしたて
「曽我物語」(14C?)

Vカケルの指向用法の例のうち始動用法につながると考えられそうなのは、このような心理的志向の例くらいであるが、(11)のような「抜きカケル」の例の後、数は多くないものの、(12)のように明確な始動用法のさまざまなVカケルが観察される。

- (12) a. 人の読みかけて置きたる大般若の唐櫃に置きて
「太平記」(1370-80?)
- b. 自害を半ばにしかけて 路の傍に伏したりけるを
「太平記」(1370-80?)
- c. 始皇ヲ葬テ後 先帝ノシカケラレタトテ作りハシメタソ
「史記抄 四」(1477)

このように、Vカカルの始動用法はその意味変化の過程が具体的に推定でき、かなり長い時間をかけて、生産力のある複合動詞へと変化したように見えるのに対し、Vカケルの始動用法の出現はやや唐突で、広がる過程がはっきりしない。そこで、菊田(2008)は、これはVカカルとVカケルの始動用法が異なる過程を経て成立したことを示唆するのではないかと主張している。まずVカカルは中古のころからメトニミー的な意味拡張によって徐々に始動用法が生まれたが、それはVカケルには共有されていなかった。その後、Vカカルの始動用法が文法化し、アスペクト的意味を持つ統語的複合動詞として確立すると、⁹ その始動用法がVカケルにも引き継がれることになったと考えている。そして、初めから他動性調和の原則などに縛られなかったVカケルは、近世以降、Vカカルを圧倒して広がっていったのではないかと推測している。¹⁰

2.3 VカカルとVカケルの理論的問題と先行研究の問題

自己対応する動詞を含むVカカルとVカケルがいずれも文法化の結果と思われる始動用法を持ち、且つ、その生産性に非対称性が見られるという事実は、他の複合動詞には観察されない興味深い現象であるだけでなく、理論的にも興味深い問題を含んでいる。文法化や意味用法の変化の用法基盤主義的研究では、文脈の中で使用されることによって生じる推意、解釈の幅や揺れ

の意義に注目する。実際、言語の変化は語彙に限らず、文法変化も、特定の文脈で用いられる具体的な事例の用例が大きな意味を持ち、急にシステム全体に変化が起こるのではなく、徐々に変化が広がっていくことが指摘されている (Traugott & Dasher, 2005; Traugott & Trousdale, 2013)。

具体的な文脈での言語使用を重視する立場では、VカカルとVカケルは厳密には互いに独立した別の語であり、Vカカルが受ける意味変化とVカケルの意味変化が単純に交差することはないことになる。中古において、Vカカルの「日暮れかかる」が落下接触から始動解釈を許しても、それに対応するVカケルがあるわけではない。それぞれが別々の連辞関係 (syntagmatic) で他の語と結びつき、それぞれの文脈ごとに意味解釈がなされるからである。確かに自他対応する動詞自体には意味的な対応があるかもしれないが、一旦、複合動詞の構成素となり、また、文法化によって意味変化を経ると、そのような対応は失われることが多い。たとえば「泣きダス」「本を読みダス」のVダスも始動を表すが、他動詞「ダス(出す)」に対応する自動詞「デル(出る)」には始動用法はなく、「泣きデル」「本を読みデル」という言い方は存在しない。¹¹ では、VカカルとVカケルという自他動詞ペアがいずれも始動用法を持つというのは、全くの偶然なのだろうか。Goldberg (2006) は、ある構文を用いるとき、話者は特定の語彙に限定された知識だけでなく、その構文に関する一般化されたスキーマの知識も持っていると述べている (Goldberg, 2006, p. 98) が、この場合、具体的にどのような知識がどのように影響したのだろうか。

この問題に対し、前節で示したように、菊田 (2008) は、始動のVカカルが統語的複合動詞として確立したことにより、Vカケルへの始動用法の拡張が進んだと考えている。この主張の裏には、文法化によってスキーマ性が高まると、個々の語彙の制約が働かなくなるという仮定がある。すなわち、自他対応する動詞を含んでいても、それぞれ異なる意味用法を持つ語彙的複合動詞の段階では用法が互いに伝播することはない。しかし、統語的複合動詞の

段階になると、語彙の意味は抽象化して統語特性も反映されなくなるので、Vカケルに始動解釈の可能性が生まれた時、自他の違いを越えて、始動用法の成立を促進したと考えている。

しかしこの主張には問題もある。まず、統語的複合動詞になったからといって、具体的にどのように「類推によって」VカカルからVカケルへの拡張が起こったのかが明確でない。また菊田(2008)は影山(1993)に基づき「指向」=語彙的複合動詞、「始動」=統語的複合動詞という対応を想定しているが、近年、影山(2012, 2013)ではこの2分類法を改めた3分類法が提案されている。それによれば、始動のVカカルは語彙的複合動詞と考える可能性があり、この点からも、中世におけるVカカルとVカケルの関係については、見直す必要があると思われる。さらに、Vカケルは近世には自動詞・他動詞の区別なく広がり、Vカカルを圧倒して広がったと推測しているが、これはあくまでも推測であり、実証的に論じられたわけではない。従って、実際に近世の状況がどうであったかを確かめる必要があるだろう。そこで、次節で複合動詞の新たな3分類法について概観し、その後、中世と近世における始動用法のVカカルとVカケルについて、特に、その両者の関係に焦点を絞ってみていくことにする。

3. 複合動詞の3分類と他動性調和の原則

第2節で述べたように、複合動詞は語彙的複合動詞と統語的複合動詞の2つに大きく分類されることが一般的だったのに対し、影山(2012, 2013)は3分類とするモデルを提案している。新たなモデルでは、語彙的複合動詞をさらに「主題関係複合動詞 (thematic compound verbs)」と「アスペクト複合動詞 (aspectual compound verbs)」の2つに下位区分する。前者では、V1とV2がいずれも「主題(項)関係を持ち、V1はV2を様々な意味関係で修飾する」(影山, 2013, p. 11)。一方、後者では基本的にV1のみが文の項関係を決定し、V2は「広

い意味での語彙的アスペクト」(影山, 2013, p. 11)を表す。広い意味での語彙的アスペクトというのは、V1が表す事象の時間的展開(開始、継続、完了、結果など)を中心に、その他、動作の強調や空間的広がりなど、事象の展開に関わる意味を含む。以下の(13)および(14)がそれぞれの例である。

(13) 主題関係複合動詞

- a. 「切り倒す」 (= 切って倒す) b. 「歩き疲れる」 (= 歩いて疲れる)
 c. 「忍び寄る」 (= 忍んで寄る) d. 「慣れ親しむ」 (= 慣れて親しむ)

(14) アスペクト複合動詞

- a. 「焼き上がる」 (= *焼いて上がる) b. 「居合わせる」 (= *居て合わせる)
 c. 「使い果たす」 (= *使って果たす) c. 「晴れわたる」 (= *晴れてわたる)

やや単純化すると、主題関係複合動詞はV2が元の動詞の意味特性を強く留めているのに対し、アスペクト複合動詞はV2がある程度文法化したものである。つまり、新たな3分類モデルが提案するのは、従来の複合動詞の分類が仮定していた「主題関係の意味=語彙的=不規則」と「アスペクトの意味=文法(統語)的=規則的」という単純な対応関係では捉えられない中間的な事例に対して、中間カテゴリーを認めるということである。逆の視点から見ると、これは、アスペクトの意味を表す複合動詞の中に、語彙的なものと統語的なものの2つを認めるということでもある。

また、この下位区分は、語彙的複合動詞に適用するとされる他動性調和の原則(影山, 1993)にも異なる反応を示すという。国立国語研究所の複合動詞コーパスを用いた調査によれば、主題関係複合動詞の場合は他動性調和の原則に適合する割合が89.5%であるのに対し、アスペクト複合動詞では適合する割合が71.4%に留まり、有意差が見られるという(影山, 1993)。ただし統語的複合動詞はこの原則を守る必要がないことを考えると、統語的複合動詞と語彙的なアスペクト複合動詞との間にはさらに大きな差があることにも注意

が必要であろう。換言すれば、アスペク的な意味を表す複合動詞には、他動性調和の原則と無関係な統語的複合動詞と、ある程度この原則を守る語彙的アスペクト複合動詞の2つのタイプがあると言うことができる。

この新たな3分類モデルの下で、始動のVカカル／Vカケルはどのように位置づけられるべきだろうか。影山 (2012) は、Vカケルを統語的複合動詞、Vカカルを語彙的アスペクト複合動詞と位置づけている (cf. 青木 (2013))。Vカケルがいつから統語的複合動詞になったのかは検討する必要があるが、通時的に考えると、VカカルもVカケルも、用法が成立したころはまだ語彙的なアスペクト複合動詞だったと考える方が妥当だろう。そこで、次節では、中世や近世のVカカルもVカケルも統語的な複合動詞ではなく、語彙的なアスペクト複合動詞であったと仮定した上で、それぞれの関係を再検討する。

4. 中世と近世のVカカルとVカケルの始動用法の関係

以下では、中世及び近世のVカカルとVカケルの始動用法について、改めてデータを調査していく。中世については、『日葡辞書』、『太平記』の諸本を調べ、近世については、国文学研究資料館の「日本古典文学大系本文データベース」と「断本大系本文データベース」を用いる。

4.1 中世のデータの再検討

上記のように、始動用法のVカカルは中世の段階でもまだ語彙的複合動詞であった考えられる。すると、この段階では動詞カカルの主題関係的な意味はすでに抽象化されていたものの、たとえば他動性調和の原則はある程度働いていた可能性がある。つまり、菊田 (2008) の主張とは逆に、他動性調和の原則を手がかりとして自動詞のVカカルから他動詞のVカケルへと広がった可能性が考えられる。もしもそうであれば、始動用法が広がる時期のVカカルとVカケルには他動性調和を守る傾向が見られることが予測される。こ

の予測を3つの角度から確かめる。

4.1.1 始動用法のVカカルとVカケル：文献データの再検討

まず、この予測が正しいことは、先ほど見た中世のデータを見直すことでも確かめられる。先に先に挙げたVカカルとVカケルの始動用法の事例を見ると、Vカカルは「暮れかかる」「落ちかかる」「消えかかる」のように、非対格のV1と結びつく傾向が見られるのに対し、Vカケルは「抜きかく」「読みかけて」「しかける」と、意思的行為を表す他動詞のV1と結びつき、他動性調和が守られている。また、菊田(2008)には挙げられていないが、『古今著聞集』(1254)には(15)のような始動のVカケルがいくつか観察できるが、「呑みかける」「落としかける」「削りカケル」と、これらもすべて意思的な他動詞である。

- (15) a. のみかけたるかへるをはき出し 「古今著聞集」(1254)
 b. さはぎに、筆をおとしかけたりけるが 「古今著聞集」(1254)
 c. 柱をすこしけづりかけて、其中にへしこめ 「古今著聞集」(1254)

このように、文献で観察される例を見直すと、数は多くないが、他動性調和の原則が守られる傾向が明らかに見られる。

4.1.2 始動用法のVカカルとVカケル：日葡辞書を通して

次に、辞書の記述を見てみよう。実のところ、VカカルとVカケルはもっぱら指向用法で用いられており、中世の始動用法の用例は数えるほどしか見いだせないのだが、それでもこれが生産力をもつ用法として中世の間に確立していたことは『日葡辞書』(原典の出版は1603年)によって明確に確かめることができる(菊田, 2008)。

ポルトガル語で書かれた『日葡辞書』は中世末の日本語の様態を伝える貴

重要な資料だが、(16) と(17) が示すように、動詞カカルとカケルには、いずれも生産力のある複合動詞としての始動用法があったことがはっきりと記されている。

(16) Cacari, u, atta (=かかり、かく、かかった)

…ほかの語と複合して、これこれの事をし始めるとか、これこれの事をしているとか、その事に従事するとかの意味を表す。例、Xicacatta (しかかった) 私はし始めていた。Xinicacaru (死にかかる) まさに死のうとしている、あるいは死につつある。

(17) Caque, uru, eta (=かけ、かくる、かけた)

…また、多くの動詞の語根に接続して、物事をし始めることを意味し、次のように言う。Xicaqete (しかけて) し始めていて。

『日葡辞書』ではこの項目とは別に、具体的なVカカルとVカケルが見出し語として採録されている。このような見出し語で始動用法と判断できるものをまとめたのが(18)と(19)である。

(18) Vカカル：シカカル、崩れカカル、落ちカカル、暮れカカル、転びカカル、寝カカル、死にカカル、成りカカル

(19) Vカケル：シカケル、作りカケル、言いカケル、抜きカケル

紙幅の都合上、これら全ての語義や説明をここに挙げることはしないが、たとえば(20)の「転びカカル」は、落下接触の用法と始動用法の両方があることを明示的に述べている。

- (20) Corobicacari, u, atta コロビカカリ、ル、アッタ (= 転びかかり、る、った)
倒れそうになる、または、物の上へのしかかる

また興味深いことに、「暮れカカル」は、語彙化が進んだと思われ、日葡辞書ではすでに、(21)のように、日没頃の時間帯を表す形容詞的な固定表現としてのみ記載されている。

- (21) Curecacaru → Facuban (薄晩)

Facuban Vsugure (薄ぐれ) すなわち、Curecacaru jibū (暮れかかる時分)
日没の時分に、または夕方日没後に、

一方、上記のように、菊田 (2008) はVカケルが「待ちカケル」のような心理的志向用法から始動用法へと繋がった可能性を主張していたが、この点に関して興味深いのは「抜きカケル」である。(22)の語義は、「抜きカケル」の始動用法に、「待ちカケル」の影響があることを示唆している。

- (22) Nuqicaqe, uru, eta ヌキカケ、クル、ケタ (= 抜き掛け、くる、けた)
刀を少しばかり抜く、または、半ば抜いて待つ

このように、『日葡辞書』からは、中世の間にVカカルとVカケルのいずれにも始動用法があるということ、またその一方で、見出し語を見る限り、Vカカルの事例の方がはるかに多く掲載されていることがわかる。さらに注目すべきことは、(18)-(19)の例から、カカルのV1は非対格の自動詞、カケルのV1には意思的な行為を表す他動詞という他動性調和の原則に沿った傾向が確認できることである。もちろんこれはあくまでも辞書の記述であり、必ずしも中世末の使用実態を網羅しているわけではなく、始動用法のVカカルやVカケルがすべて他動性調和の原則を守っていたという証拠にはなり得ない

だろう。(16)-(17)のようにVカカルやVカケルが生産性を持つと明記されている以上、見出し語以外の組み合わせも当然あったと考えられるし、事実、本稿でもこの見出し語以外の例を見てきた。しかし、注意すべきは「見出し語」の持つ意味である。他の組み合わせも可能な中で敢えて見出し語になっているということは、これらが高頻度に用いられる組み合わせであることを示している。つまり、高頻度な組み合わせに他動性調和の原則が守られる傾向があることは確かと言えるだろう。

4.1.3.『太平記』の諸本から見た始動用法のVカケルの成立と他動性調和の原則

最後に、やや異なる角度から他動性調和の原則に対する振る舞いを見てみる。上述のように、始動のVカケルは『太平記』『義経記』などの中世の軍記物に見られるが、それらは作者不詳で、成立年代も曖昧であり、異本が非常に多い。例えば『太平記』は1370-80年代の成立とされるが、その後、何度も書写されると共に、意図的に増補、編集されたこともあり、現在、80数本の写本や古活字本が存在するという(鈴木, 1978)。これらは内容の異同を元にくいつかの系統に分けられ、それらの相違や複雑な成立の関係などについては鈴木(1978)の4分類や高橋(1980)の『太平記諸本の研究』などの詳細な研究がある。これら諸本は、話の内容にも異同があるくらいであるから、VカカルやVカケルといった細かな文言まで成立当初のままのものを反映しているかには疑問がある。しかし、最も古い時代の表現を厳密に特定することはできなくても、主な写本の刊行された時期は近世の初め頃であるので、諸本のいくつかを比較することで、中世末までの間に見られるVカケルの特徴や変化の兆しを捉えることはできるかもしれない。

そこで、本節ではVカケルの始動用法が複数観察される『太平記』の写本間の表現の対応を見てみることにする。具体的には、古態性を強く留めるとされる「神田本」と「玄玖本」(cf. 鈴木(1978)、高橋(1980))と、小学館『新編日本古典文学全集』(底本は水府明德会彰考館蔵天正本)の太平記(以下、

「天正本」と、国文学研究資料館でデータベース化されている岩波書店『日本古典文学大系』の太平記（底本は慶長8年（1604）刊行の古活字の流布本）（以下、「流布本」）、そして、ひらがなで書かれているため読みが確定される土井本『土井本太平記本文及び語彙索引』（勉誠社）を加えた5つを比べる。『太平記』が成立したとされる1370-80年頃とこれら諸本の刊行年の間にはかなりの時間が経過しているが、多くの写本に共通して見られる文は、ある程度、成立当初の形を反映していると考えことにする。¹²

これら写本のいずれかにおいて観察されるVカケル（およびその可能性のあるもの）で、始動用法と考えられるものは14個あり、それらを抜き出すと以下の表1のようになる。¹³

	巻	神田本	玄玖本	小学館 (天正本)	大系 (流布本)	土井本 (流布本系)
1	巻2	× (消わびぬる露の身の置きどころ)	× (消侘ぬる露の身の、置きどころ)	× (消え侘びぬる露の身の、置きどころ)	消え懸る露の身の置きどころ	消えかかる露の身の置きどころ
2	巻5	× 欠本	人の読み懸て置きたる大般若	人の読み懸けたる大般若	人の読み懸て置きたる大般若	人の読み懸けて置きたる大般若
3	巻6	× 欠本	あるいは淵瀬をも知らず渡し懸て	あるいは淵瀬とも知らず河を渡しかけて	あるいは淵瀬をも知らず渡し懸て	あるいは淵瀬をも知らず渡しかけて
4	巻7	切って落し懸たりける間	切って落し懸たる間	切って落し懸たりける間	切って落し懸たりける間	切って落しかけたりける間
5	巻7	さきかけてかつ色見せよ 山さくら	さきかけてかつ色みせよ 山さくら	さきかけてかつ色見せよ 山さくら	さき懸てかつ色見せよ 山さくら	さきかけてかつ色見せよ 山さくら
6	巻7	^{なましひ} 恔に渡りかかりたる兵共	恔に渡り懸たる兵ども	恔に渡り懸けたる兵ども、	恔に渡り懸りたる兵ども	恔にわたりかかりたる兵ども
7	巻12	× 欠本	玉体に立副ひ太刀を抜き懸て	帝の玉体に立ち副い奉り、太刀を抜きかけて	玉体に立副進せ太刀を抜き懸て、	玉体に立ち添ひ参らせ、太刀を抜きかけて

8	卷14	太刀をぬかんとしけるが目やくれん 一尺計抜かけて	太刀を抜んとしけるが、目やくれけん、一尺ばかり抜懸て	×該当箇所なし	太刀を抜んとしけるが、目やくれけん、一尺ばかり抜懸て	太刀を抜かんとしけるが、目やしゃくれけん、一尺ばかり抜きかけて
9	卷28	ハヤリノままにわたしかけて	ハヤリノままに渡かけて	早りの儘に渡しかけて	早りの俵に渡し懸て	早りのままに渡しかりて
10	卷28	劍をぬきかけ跪て	劍を抜かけ跪て、	×該当箇所なし	自劍を抜懸て跪て、	自ら劍を抜きかけて跪きて
11	卷29	× 欠本	× (寄の大勢挽とも騒がず)	御方の大勢崩れ懸て引きけれども騒がず	二萬余騎、崩れ懸て引けれども騒がず	崩れかかりて引けれども騒がず
12	卷29	× 欠本	自害を半に仕懸て	×該当箇所なし	自害を半ばにしかけて	自害を半ばにしかけて
13	卷31	追かくる敵の川中までわたしかけたると	追て懸る敵の河中まで渡懸たると	× (二十余騎河中にて返し合はせ、支え戦ひし)	追かくる敵の河中まで渡懸たると、	追っかくる敵の川中までわたりかかりたると、
14	卷31	×該当箇所なし	×該当箇所なし	これ程に事のなり懸けて	×該当箇所なし	×該当箇所なし

表1：『太平記』諸本にみられる始動の「Vカケル」

まず気づくのは、全ての写本に対応する表現があるとは限らないこと、そしてVカカルとVカケルの区別が明示されない場合が多いということである。たとえば[1]の「消え懸る」や[11]の「崩れ懸る」はVカカルかと思われるが、Vカケルの可能性も排除はできない。いずれにせよ、そのような可能性も含めて3つ以上の写本に対応するVカケルがあるものは以下の6種である。

- (23) 読みカケル、渡しカケル、落としカケル、咲きカケル、抜きカケル、しカケル

(23)からは、VカケルのV1のほとんどが他動詞であることがわかる。¹⁴ さらに興味深いのは、写本間にみられるバリエーションである。たとえば、上の

表で複数見られる「渡る／渡す」をV1とする表現に注目してまとめると次の表2ようになる。読みが確定できる例について、V1V2の動詞の自他の組み合わせをそれぞれの語の下に記した。¹⁵

	神田本	玄玖本	小学館 (天正本)	大系 (流布本)	土井本 (流布本系)
3	× 欠本	渡し懸て	渡しかけて (他他)	渡し懸て	渡しかけて (他他)
6	渡りかかりたる (自自)	渡り懸たる	渡り懸けたる (*自他)	渡り懸りたる (自自)	わたりかかりたる (自自)
9	わたしかけて (他他)	渡かけて (他他)	渡しかけて (他他)	渡し懸て	渡しかかりて (*他自)
13	わたしかけたる (他他)	渡懸たる	×	渡懸たる	わたりかかりたる (自自)

表2：『太平記』諸本にみられる始動の「渡りカカル」「渡しカケル」とそのバリエーション

表2からは、いずれも、「渡る」にはカカル、「渡す」にはカケルという、他動性調和を守る組み合わせ方が優勢であることがわかる。しかし、注目すべきは、いずれも原則に反する形(*印)が見られる事である。また、写本毎に見ても、必ずしも一貫性はない。ほとんどは他動性調和を守った形であるが、天正本には「渡りカカル／カケル」があり、土井本には「渡しカカル／カケル」がある。このように、中世から近世までの間には、VカカルとVカケルについて、他動性調和の原則がかなり守られていること、そしてその一方で、揺れが見られることがわかる。¹⁶この二面性は語彙的アスペクト複合動詞の中間的な性質を反映しているといえるだろう。¹⁷

以上、中世におけるVカカルとVカケルの関係を見てきた。具体的データ、『日葡辞書』の記述、『太平記』の諸本での対応を通し、いずれにおいても、中世のVカカルとVカケルには他動性調和の原則を守る傾向があったことが

確認できる。ただ、それだけでは、これらが語彙的なアスペクト複合動詞であった可能性は強く示唆するものの、両者が関係し合ったかどうかはわからない。一方、『太平記』の諸本に見られる揺れや不一致は、この両者が明らかに関連したものと捉えられていたことを示唆している。つまり、室町時代にVカケルが成立する際には、他動性調和の原則を手がかりに、先に成立したVカカルの始動用法からその用法を受け継いだ。そして、非対格動詞のV1の始動にはVカカルの形を取るのに対し、非能格や他動詞のV1の始動にはVカケルの複合動詞を用いることを通して、Vカケルの始動用法が確立していったと考えられる。

4.2 近世のVカカルとVカケル

では、近世に入ってからVカカルとVカケルの様子はどうか。本節では、「日本古典文学大系本文データベース」と「断本大系本文データベース」を用いて、近世の様子を調べる。

近世になるとVカケルはかなりタイプ頻度が増え、(24)のように、さまざまな意図的な行為を表す動詞をV1とする用例を見つけることができる。

(24) a. 殿お出で。昨日のさしかけの將碁勝負付けましよ

「山崎與次兵衛壽の門松」(1718)

b. 客ハ柿を一つくひかけ、是ハ渋いと、又一つ取て

「茶のこもち」(1774)

c. ある夜、茶わんでのミかける所へ、友だち来り 「聞童子」(1775)

d. 五人は向ふへ行かけるを 「韓人漢文手管始」(1789)

e. せつゐんへ行、しばらく有て二かゐへ上りかけると、

「軽口筆彦断」(1795)

その一方、(25) が示すように、少なくとも17C後半には非対格動詞と結び

- b. 廿二十五の暮から逢ひかゝり 何年に成ることぞ
「夕霧阿波鳴渡」(1712)
- c. あらゆるうろくず、鱗をならべかゝりければ 「年忘嘶角力」(1776)
- d. 箱より道具取り出し磨かゝる 「時勢話綱目」(1777)
- e. あすハおもひきつて、四つから起て縫かゝろう 「柳巷訛言」(1783)
- f. かミ様、二階にふとんの綿を入かゝつて居る所
「虎智のはたけ」(1800)
- g. あらひかけた牛房にんじんをほうりだして、ミそをすりかゝり
「笑府商内上手」(1804)
- h. 紙をへがし書かゝる。 「小袖曾我薊色縫」(1858)

姫野(1999)が述べるように、現代日本語でVカカルは意思的動詞とは結びつきにくいものの、不可能というわけではない。(27)の例も現代日本語ではいづれもあまり自然とは言えないと感じるが、容認できないとまでは言えないように思われる。しかし、それでも(27b)の「逢ひカカル」や(27e)の「縫いカカル」、(27h)の「書きカカル」などは、少なくとも筆者の主観ではあるが、現代ではかなり違和感のある表現に思われる。これらの作品の作者の個人的な癖や文体の特徴などの影響もあるとは思われるが、この時代の始動用法のVカカルの総数がそれほど多いわけではない中でこのような事例が複数観察されるということは、現代よりも近世の方が始動のVカカルの意思動詞との結びつきに対する制約が緩かった可能性を示唆すると言えるだろう。

菊田(2008)は近世に入るとVカケルが様々なV1と結びつくようになって文法化を進める一方で、Vカカルがその領域を奪われ、勢力を失ったのではないかと予測していた。しかし、実際にはそのような様子は明らかには認められない。確かにVカケルは結びつく動詞を増やし、Vカカルと強く結びついていた「暮れる」などの非対格動詞とも結びつくようになったことが確かめられる。けれどもその一方で、Vカカルも意思動詞である非能格動詞や他動

詞と結びつくようになっていくことが窺われる。

この状況はどのように捉えればよいのだろうか。1つには、VカカルとVカケルのいずれもが文法化を進める中で、他動性調和の原則がかからなくなってきたことを示していると言えるだろう。さらに、これはDe Smet et al. (2018)の主張する誘引 (attraction) の事例といえるのではないかと考える。De Smet et al. は通時的な構文文法の立場から、異なる構文が同じような意味機能を持つようになった場合にどのようなことが起こるかについて論じている。それによれば、一般に、異なる構文が類似した機能を持つ場合、通常は構文間に競合 (competition) が起こり、その結果、一方のみが勝ち残って他方にとって代わる代替 (substitution) か、あるいは両方がそれぞれ棲み分けを起こす分離 (differentiation) の状態になると考えられがちである。しかし競合だけでは、その後の変化がどのような過程で進むかを十分に説明できない。De Smet et al. は、競合する構文間の関係の変化をもたらすのは、構文が受ける様々な類推 (analogy) の力であると主張する。そして、この類推の結果、競合する形式同士は、その過程で互いが引き合い (attraction)、それによって、さらに類似度を増すことがしばしば見られるという。そして、構文は競合し合うその2つだけでなく、より大きな構文のネットワークと関係づけられると述べ、英語やオランダ語の言語現象の分析をおこなっている。

一般に、言語の意味と形式の結びつきは1対1のisomorphicな対応が最も経済的で、異なる形式が同じ意味を表すという重複は体系にとっては余剰であり、そのような機能的な重複が生じた場合には、速やかに競合が起こり、余剰を排除するように働くと考えられることが多い。端的に言えば、「形が異なれば意味も異なる」はずであり、同義関係にあるとされる語彙も、全く同じ意味ではなく、違いがあるはずとされる。これ自身が誤った考えではないが、実際の言語使用の中では余剰はある程度容認され、類似性を持つ構文間の関係も必ずしも競合だけとは限らないというのがDe Smet et al. (2018)の主張である。また、競合する形式の変化は、その形式だけの関係ではなく、よ

り広い文法的な文脈、構文のネットワークなどを視野に入れて考えるべきであるとも述べている。VカカルとVカケルは文法化を進め、近世になるといづれも始動用法を持つだけでなく、他動性調和の原則に影響される度合いも低くなってきたと考えられる。このような中、VカカルとVカケルの機能的な差異が認識されにくくなり、両者はより類似した振る舞いを見せ、誘引し合う状態にあったのではないだろうか。¹⁸

4.3. VカカルとVカケルの関係の理論的な示唆：構文ネットワークの提案

以上、中世と近世における始動用法のVカカルとVカケルの展開の様子やその関係を見てきた。菊田(2008)では始動用法の複合動詞を統語的複合動詞と考えていたため、中世の始動用法のVカカルやVカケルには語彙的な制約や他動性調和の原則から自由であったと考えていたが、実際にはこの原則を守る傾向が観察され、むしろこの原則に沿って、自動詞のVカカルが他動詞のVカケルへ始動用法を拡大していったと結論づけた。これは、影山(2016)が提案する複合動詞の3分類説を受け入れ、少なくとも中世にはVカカルもVカケルもいずれもが語彙的なアスペクト複合動詞であったと考えると説明がつく。第3節で述べたように、アスペクト複合動詞は主題関係複合動詞と統語的複合動詞の中間的性質をもち、他動性調和の原則も主題関係複合動詞とは有意な差があるものの、統語的複合動詞に比べると有意に他動性調和の原則を守る傾向があるからである。

一方、近世になると、確かにVカケルが他動詞だけでなく自動詞のV1へと用例を広げていく様子が確かめられるが、予測に反し、Vカカルも一方的にVカケルに勢力を奪われるだけではなかった。近代以降、最終的にはVカカルとVカケルには非対称性が生まれる事になるわけだが、意外にも、近世の段階ではそれほど明確な非対称性が観察されない。データを見る限り、Vカカルの中には、現代日本語ではあまり見られないような意思的な他動詞があり、Vカケルが他動詞から自動詞へと広がる中で、Vカカルも自動詞だけで

なく他動詞と結びつく例が見られた。前節ではこれをDe Smet et al. (2018)の主張するattractionの事例と考えた。VカカルとVカケルが共に始動用法を成立させ、文法化を進める中で、両者の間には類推が働き、より類似性が高くなっていったのではないだろうか。¹⁹

最後に、ここまで中世から近世へのVカカルとVカケルの問題を文法化として論じてきたが、以下ではVカカルとVカケルを文法化を経た構文と捉え、その関係を考える。文法化という概念は、ある表現Aがより文法的な表現Bと再分析されることを意味する。本稿の問題では、指向用法のVカカルが始動用法のVカカルと再分析されることや、同じく指向用法のVカケルが始動用法のVカケルと再分析されることを指し、関連する現象としては、他動性調和の原則が守られる度合いの変化も含む。つまり文法化とは本来、ある表現内部の変化である。しかし本稿では始動用法の問題をVカカルとVカケルという別個の表現の間に生じる「関係」という視点から論じてきた。このような視点は本来、文法化という概念の範囲を越えるものである。本稿での主張をまとめるにあたり、表現間の関係を捉える視点として、構文と構文ネットワークという概念を用いることにする。

構文とは、単純化して述べると、何らかの形 (form) と意味 (meaning) の対であり、それが慣習的に結びついて用いられる言語的な単位を指す (Goldberg, 2006)。構文は単独に存在するのではなく、互いにネットワークを形成していると考えられている (Goldberg, 1995, 2006; Langacker, 2008; Traugott & Trousdale, 2013)。認知心理学では人間の知識や概念は関連するもの同士、連想によって結びつき合っていると考えられ、構文のネットワークは、これを反映し、話者の言語知識を部分的に表象するものとされている。近年、通時的構文文法でも、言語変化を構文のネットワークの形成から分析する有用性が指摘されている (cf. Sommerer & Smirnova, 2020)。²⁰

本稿では、非常に単純化した形ではあるが、中世と近世に見られたVカカルとVカケルの関係、また、時代による関係の違いは、大まかに以下のよう

なモデルで捉えることができるのではないかと考える。

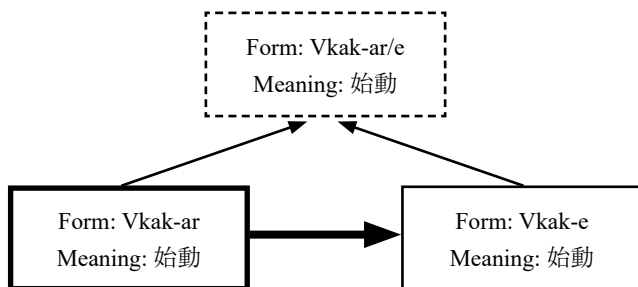


図1 中世のVカカル／カケル始動構文のネットワーク

まず図1は中世の様子である。それぞれの四角は構文を表し、構文の上下関係は具体性のレベルを表す。すなわち、3つの構文のうち、下の2つがそれぞれVカカル構文とVカケル構文を表し、上の構文はそれらに共通する上位構文として、スキーマ化されたものである。このモデルでは、構文を囲む四角の線の種類や太さが構文としての定着度・確立度 (entrenchment) を示す。このモデルが表すのは次のことである。

中世においては、まだ語彙的アスペクト複合動詞で結びつくV1の種類は多くないものの、始動用法のVカカル構文がすでに成立していた。構文を囲む太い線がそのことを示している。この段階では他動性調和の原則もまだ比較的強く残っており、むしろそれに沿って、他動詞Vカケルが広がっていった。VカカルからVカケルへの矢印がその拡張の方向性を表す。そして、このような拡張が進むにつれ、その2つの構文から、この両者を包含するような上位構文が意識されるようになっていったのではないかと考える。図1において、2つの構文の上に点線で囲まれた上位構文があるが、そこに向かって2つの構文から出ている矢印はスキーマ化の方向を表し、上位構文はまだ強く意識されていないことを点線が表している。このモデルが示すのは、中世の頃、まず定着していたのはVカカルのみで、そこから徐々にVカケルへ

の拡張が起こったことと、それと同時に、おそらく自他対応するカカル／カケルのつながりが意識され、それらをまとめたやや抽象的なレベルでの上位構文が少しずつ認識され始めたのではないかということである。

さらに近世になると、この3つの構文の関係性に変化が生まれたと考える。図2に近世における構文の関係を示す。

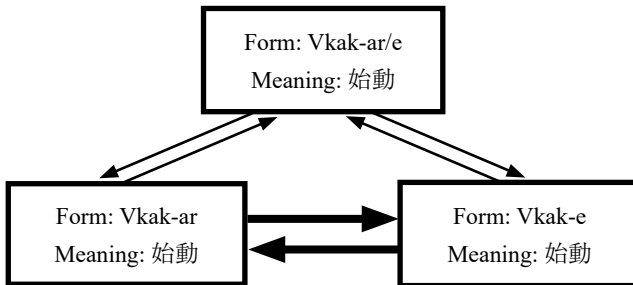


図2： 近世のVカカル／カケル始動構文のネットワーク

図1とは異なり、上位構文の囲みが点線ではなく、太い実線になり、下位構文からの矢印に加え、逆方向の矢印が加わっている。この違いは以下のことを表す。まず囲みの実線は、近世においてVカカルとVカケルの上位構文が定着し、このレベルの存在が認識されるようになって示していることを示す。また、具体的なVカカルとVカケルの使用が増える中で、スキーマ化は絶えず続いているが、同時に、上位構文に基づいて下位構文であるVカカルやVカケルを認可する側面も生まれる。これが上下を繋ぐ両方向の矢印が示すことである。さらに近世ではVカカルとVカケルに互いを引き合う関係(=attraction)が見られたが、これを水平方向の2つの矢印が示している。

本稿で考察したVカカルとVカケルの成立やその変化を捉えるには、他動性調和の原則など、文法化というそれぞれの表現内の変化を考慮に入れるべき側面もあるが、それに加え、形や意味機能上の類似性を持つVカカル・Vカケルの関係も考慮に入れる必要がある。後者を捉えるには、それぞれを構

文と捉え、その構文ネットワークという視点から分析することが有用である。上記のネットワークの表記自体はやや便宜的なものであるので、別の表し方も可能であろうが、重要なことは、構文間は互いに関係し、また、その関係は言語の使用によって変化すること、そして、このような構文ネットワークは言語を使用する者の理解を表象することである。つまり、中世や近世に見られたVカカル・Vカケルの使用やその変化は、このような構文関係を話者が認識していたことを示していると考えられる。

6. 結語

本稿は中世および近世の複合動詞VカカルとVカケルの様子を実証的に明らかにすることを通し、自他対応する動詞を含むこの両者がどのように関係しあったかを構文ネットワークによってモデル化した。本稿が主張したのは以下の点である。まず、中世から近世のVカカルやVカケルを捉えるには、影山(2013)の複合動詞の3分類が有効であるが、通時的な現象を捉えるには、単に3つに分類するのではなく、その中間段階である語彙的アスペクト複合動詞という範疇をさらに細かな連続性を持ったものとして捉える必要がある。始動用法のVカカルとVカケルの場合、中世の早い段階では生産性が低く、他動性調和の原則なども強くかかっているが、中世の終わりから近世になり、統語的複合動詞により近い段階になると、生産性が高くなり、他動性調和の原則もあまりかからなくなっていくことがわかる。また、実証的な結論として、中世から近世にかけてのVカカルからVカケルへの拡大は、他動性調和の原則を守りながら進んだ可能性が高いこと、そして、近世のVカカルとVカケルには、両者の用法がさらに近づくという、De Smet et al. (2018) が主張する誘引 (attraction) の状態が見られたことである。そして最後に、このような中世と近世に見られるVカカルとVカケルの関係、そしてその通時的な違いを捉える構文のネットワークを提案した。

通時的な研究は確実なデータの採取が何より重要であるが、それが同時に困難の源でもある。本稿で論じたVカカルやVカケルの始動用法についても、近世以降に比べ、中世以前のデータは非常に少なく、また、年代の特定も難しい。できるだけ慎重に論じたが、それでも文献として手に入りにくい、あるいは現存しない言語使用の実態の中に、本稿の議論とは矛盾する事実がある可能性は否定できない。今後も、国立国語研究所の日本語歴史コーパスをはじめ、データの電子化が進む中、より正確な姿を捉えるべく、調査を継続する必要があると考える。

注

- 1.『日本国語大辞典』は、OEDのように、それぞれの語義の「もっとも古いと思われる」用例を採用するという方針を取っているが、その選択は必ずしも信頼できるわけではない。事実、Vカケルの始動用法の最も古い用例として挙げられているのは17C後半のものであるが、本稿でも言及するように、実際には13C後半には用例を確かめることができる(菊田, 2008)。
- 2.これらはデータベースであってコーパスではないため、品詞などを用いた検索ができない。そこで、「カカル」や「カケル」の様々な文字表記や活用の形をキーワードとして検索した。そのため大量にヒットする表現の大半は無関係な文字列だが、それらは全て目視で確認し削除した。その後、複合動詞のカカル、カケルを選び出した上で、『日本古典文学大系』や『新編古典文学全集』で文脈や現代語訳などを調べ、それを参考に、始動用法のみを特定した。国立国語研究所の『歴史コーパス』も参考に調査したが、残念ながら中世の部分についてはまだ十分でなく、Vカケルが複数観察される『太平記』や『古今著聞集』が含まれていないため、参考に留め、本稿では使用しなかった。
- 3.本稿は、現代日本語に見られるVカカルとVカケルの非対称性の原因については論じない。この非対称性は、VカカルとVカケルの直接の関係から生まれたものではなく、本動詞カカルの用法変化が影響を与えた間接的な結果と考えている。具体的には、本動詞カカルが近世に獲得した新しい意味用法によってVカカルの文法化過程が阻害された可能性があると考えている(Kikuta, 2021)が、詳細は別稿に譲る。
- 4.もちろん、厳密に「言い換え」られるわけではない。例えば「笑いかける」は「笑って、

かける」とは言えない。しかし、「カケル」の持つ「相手に向かう、働きかける」という意味が反映されていると考えられる。

5. なお、金田一 (1976) はこれをさらには始動態（動作を始めて半ばで中止した）と将現態（動作が行われる寸前の状態に達したが行われていない）の二つに分けている (姫野, 1999) が、ここではこの二つの区別については取り上げない。
6. 影山 (1993) は「V込む」「V去る」などいくつかの語彙的複合動詞はこの原則を守らないことを観察し、この場合は語彙概念構造で合成されると提案している。また、日本語の古典語では、他動性調和の原則はあまり守られていないという観察がある。これは複合動詞の構造が現代のものとは異なっていたことを示すという分析もある。また、これは古典語に「複合動詞」があったのかという定義の問題とも関わる。(詳しくは青木 (2016) などを参照のこと。) 本稿はこの問題には立ち入らず、表面的に2つの動詞がまとまって使用されているものを複合動詞と考える。
7. それに加え、現代には見られなくなった「言ひカケル」や「読みカケル」という「声に出す」という意味用法や、「思ひカケル」(=意識する)などの指向用法も認められる。後者は、現代では「思いがけない」のような否定での固定表現としてのみ残存している。
8. 同様に軍記物に多く見られる「射かく」は相手を狙って矢を射ることを表し、指向接触とも言えるが、弓矢を構えて狙うという部分は「準備」のようにも思われるかもしれない。しかし、実際の用例を見る限り、始動用法とは解釈しにくいものばかりのようである。
9. 語彙的複合動詞と統語的複合動詞の区別は複合動詞のスキーマ性の違いやV1の特定性の問題と考えており、影山 (1993) が提案する統語構造を受け入れているというわけではない。
10. 他にも、同じく始動アスペクトを表すVダスが他動詞V2に統一されたことなどからの類推もあったのではないかと推測している。この点については、可能性はあるが立証するのは容易ではないだろう。
11. ただし、Vダスの成立はかなり複雑である (関, 1977; 百留, 2002)。現代日本語では始動の意味を表すのは他動詞ダスによるVダスのみであるが、かつては逆に自動詞イズ (=出る)のみであったのが、中世の頃までに全て他動詞に変わったとされる。この際にも、この自他動詞の交替は、アスペクト的な始動の意味が確立した後起こっている。
12. 諸本の系統や内容の異同、成立過程などについては高橋 (1980)『太平記諸本の研究』を参照のこと。
13. なお、漢字と仮名の区別は写本通り。平仮名と片仮名については、読みやすさを

優先し、すべて平仮名に統一した。土井本は本来すべて仮名であるが、『土井本太平記本文及び語彙索引』では、いくらか漢字に変換したものを並記しており、ここではその漢字表記に従った。表の中で「×」は対応が見られないことを示すが、3つの種類がある。「欠本」とは当該写本でその巻全体が欠損していること、「該当箇所なし」は対応する描写がないもの、×の後の括弧は対応する描写はあるが、Vカケルではない形で表現されているものである。なお、天正本については、対応する表現が見られる巻番号が他と異なるものがいくつか含まれている。

14. #5は自動詞と結びつく「さきカケル」(=咲きカケル)で、例外であるが、『新編古典文学全集』の注釈によると、これは和歌の一部で、「(他の花に)先がけて」と「咲く」と掛けているとされている。
- 15.「渡る」は非能格か非対格かの判断が難しいため、ここでは自動詞のみしておくが、来カカルや行きカカルをはじめ、移動を表す自動詞は中古の頃からカカルとの結びつく「通過接触」であったことから、非対格相当と考えられるだろう。
16. この複合動詞に関しては、実際の用例での意味の重複もあった。自動詞「渡る」は主語自らが移動するのに対し、「渡す」は目的語にあたるものを移動させるという意味である。しかし、『太平記』の文脈では、後者は騎馬に乗って川を渡るという場面で用いられ、人間と騎馬はいわば人馬一体となっており、「人が(馬を)渡す」と言っても、再帰的に主語も目的語も移動する主体となる。「馬を」という目的語が明示されないことが多いことから、このような意味の重複により、自動詞と他動詞の区別はあまり意識されなかった可能性がある。
17. 「神田本」と「玄玖本」を古態本とすれば、この2つで他動性調和の原則が守られていることから、古い時代の方が他動性調和の原則が守られ、後の時代の写本では文法化が進んでこの原則の乱れが見られるようになったとすることも可能かもしれないが、データも少なく、また、諸本の成立過程や関係も詳細は不明であることから、拙速な判断はできないと考える。
18. 本稿では取り上げなかったが、Vカカルが意思動詞と結びつく傾向には、本動詞カカルの新用法の影響も考えられる。ただ、どれが原因でどれが結果であるかを判断することは難しく、これらは相互に影響しあったものと考えられる。なお、Traugott (2020) はDe Smet et al. (2018) に対し、機能的重複の際、誘引だけでなく、棲み分けも同等に重要であると主張している。
19. このような状況を見ると、なぜ現代日本語でVカカルの意思的動詞と結びつく用法が衰退し、非対称性が生じることになったのかという疑問が一層強く感じられるかもしれない。この問題については、注3を参照されたい。
20. 構文ネットワークには多くの考え方があり、構文を節点 (node) として、複数の構文を結びつける (link) ということは共通するものの、結びつけられる構文間に

どのような制約があるのか、どのような種類の結びつきが想定されるのか、また、このようなネットワークは厳密な形式的制約で規定されるべきなのか、単に連想関係を表現しているのかなど、多くの議論がある (Goldberg, 1995; Traugott & Trousdale, 2013; Kikuta, 2018; Sommerer & Smirnova, 2020; Hilpert, 2021など)。ここでは形式的な問題には立ち入らず、構文間の繋がり の理解の仕方を大まかに捉えるものとして考えている。

謝辞

本研究はJSPS科研費基盤研究 (C) (21K00489) の助成を受けた。また、本稿は2020年2月28日に同志社大学で開催されたテンス・アスペクト小研究会、2020年8月26日の関大での勉強会 (オンライン)、また、2021年8月20日にアントワープ大学とオンラインのハイブリッドで開催されたThe 11th International Conference of Construction Grammarにて口頭発表した内容の一部を発展させたものである。益岡隆志氏、岩田彩志氏、今野弘章氏、松本曜氏はじめ、口頭発表の際に有意義なコメントを下された方々、また、本論文の2名の査読者にも深く感謝したい。なお、本稿の不備はすべて著者に帰すものである。

参考文献

- 青木博史. (2013). 「複合動詞の歴史的変化」 影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』 (pp. 215-241). ひつじ書房.
- Bybee, J. (2010). *Language, usage, and cognition*. Cambridge University Press.
- De Smet, H., D'hoedt, F., Fonteyn, L., & Van Goethem, K. (2018). The changing functions of competing forms: Attraction and differentiation. *Cognitive Linguistics* 29(2) 197-234. <https://doi.org/10.1515/cog-2016-0025>
- 土井忠生・森田武・長南実. (1980). (編訳) 『邦訳 日葡辞書』 岩波書店.
- Goldberg, A. (1995). *Constructions: A Construction Grammar approach to argument structure*. Chicago University Press.
- Goldberg, A. (2006). *Constructions at work: The nature of generalization in language*. Oxford University Press.
- 東辻保和・岡野幸夫・土居裕美子・橋村勝明 (編) . 『平安時代複合動詞索引』 清文堂.
- Hilpert, M. (2021). *Ten lectures on Diachronic Construction Grammar*. Brill.

- 姫野昌子. (1999). 『複合動詞の構造と意味用法』 研究社.
- Hopper, P. J., & Traugott, E. C. (2003). *Grammaticalization* (2nd ed.). Cambridge University Press.
- 影山太郎. (1993). 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- 影山太郎. (1999). 『形態論と意味』 くろしお出版.
- 影山太郎. (2012). 「レキシコンと文法・意味：複合動詞研究のこれから」 関西言語学会第37回大会シンポジウム「日本語レキシコン研究の最前線」(甲南女子大学、2012年6月2日) 発表資料.
- 影山太郎. (2013). 「語彙的複合動詞の新体系—その理論的・応用的意味合い」 影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』 (pp. 3-46). ひつじ書房.
- 菊田千春. (2008). 「複合動詞「[Vかかる][Vかける]」の文法化—構文の成立とその拡張」 『同志社大学英語英文学研究』 81・82合併号, 115-165.
- Kikuta, C. U. (2018). Development of conditional imperatives in Japanese: A diachronic constructional approach, *Cognitive Linguistics* 29(2), 235-273. <https://doi.org/10.1515/cog-2014-0081>
- Kikuta, C. U. (2021). An unexpected blocking of language change: The asymmetry in Japanese inchoative constructions. Paper presented at the 11th International Conference of Construction Grammar (ICCG), August 20, 2021, University of Antwerp, Belgium (online).
- 金田一春彦. (1976) (編). 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房.
- Langacker, R. W. (2008) *Cognitive Grammar: A basic introduction*. Oxford University Press.
- 百留康晴. (2002). 「複合動詞後項「一出す」における意味の歴史の変遷」 『文化』 66-1・2, 17-33.
- Perek, F. (2020). Productivity and schematicity in constructional change. In L. Sommerer & E. Smirnova (Eds.), *Nodes and networks in Diachronic Construction Grammar* (pp. 141-166). John Benjamins.
- 関一雄. (1977). 『国語複合動詞の研究』 笠間書院.
- Smirnova, E., & Sommerer, L. (2020). Introduction: The nature of the node and the network: Open questions in Diachronic Construction Grammar. In L. Sommerer & E. Smirnova (Eds.), *Nodes and networks in Diachronic Construction Grammar* (pp. 1-42). John Benjamins.
- Sommerer, L., & Smirnova, E. (2020). *Nodes and networks in Diachronic Construction Grammar*. John Benjamins.
- 鈴木登美恵. (1984). 「太平記」日本古典文学大辞典編集委員会 (編) 『日本古典文学大辞典』 第4巻 (pp. 105-111). 岩波書店.
- 高橋貞一. (1980). 『太平記諸本の研究』 思文閣出版.
- Traugott, E. C. (2020). The intertwining of differentiation and attraction as exemplified by the

- history of recipient transfer and benefactive alternations. *Cognitive Linguistics* 31(4) 549-578. <https://doi.org/10.1515/cog-2019-0042>
- Traugott, E. C., & Dasher, R. B. (2005). *Regularity in semantic change*. Cambridge University Press.
- Traugott, E. C., & Trousdale, G. (2013). *Constructionalization and constructional changes*. Oxford University Press.
- Zehentner, E., & Traugott, E. C. (2020). Constructional networks and the development of benefactive ditransitives in English. In L. Sommerer & E. Smirnova (Eds.), *Nodes and networks in Diachronic Construction Grammar* (pp. 167-211). John Benjamins.

テキスト及びデータベース

- 黒川真道・矢野太郎・馬瀬長松・友年龜三郎（校）. (1907). 『太平記：神田本』 国書刊行会.
- 前田徳育会尊経閣文庫（編）. (1973-75). 『太平記：玄玖本』 勉誠社.
- 後藤丹治・釜田喜三郎（校注）. (1960-1962). 『太平記』（日本古典文学大系34巻－36巻）岩波書店.
- 長谷川瑞（校注・訳）. (1994-1998) 『太平記』（新編日本古典文学全集54巻－57巻）小学館.
- 西端幸雄・志甫由紀恵（編）. (1997). 『土井本太平記：本文及び語彙索引』 勉誠社.
- 国文学研究資料館 「日本古典文学大系本文データベース」 <https://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/>（2021年5月18-20日閲覧）
- 国文学研究資料館 「新本大系本文データベース」 http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvSearch.cgi（2021年5月21-22日閲覧）

Synopsis

The inchoative *V-kak.ar* and *V-kak.e* in Late Middle and Early Modern Japanese: Their interactions from a perspective of the constructional network

Chiharu Kikuta

This paper investigates the diachronic development of the inchoative complex predicates *V-kak.ar* and *V-kak.e* in Late Middle and Early Modern Japanese (LMJ: 13C-16C and EModJ: 17C-19C) with descriptive and theoretical goals. The intransitive *kak.ar* and the transitive *kak.e* form a transitivity pair sharing the same root *kak*, meaning “hang,” “cover,” among others. The complex predicates *V-kak.ar* and *V-kak.e* both have acquired the aspectual meaning (i.e., ‘start to V’ or ‘be about to V’) through grammaticalization, as exemplified by such phrases as “obore-kak.ar.u” ‘be about to get drowned’ and “wasure-kak.e.ru” ‘begin to forget.’ Interestingly, however, they are asymmetrical in the sense that only the latter, which developed later than the former, is fully productive in the Present-day Japanese (Himeno, 1999).

Exploring the data in Early Middle Japanese (EMJ: 9C-12C) and LMJ, Kikuta (2008) argues that the inchoative usage of *V-kak.ar* emerged in EMJ with a limited set of verbs through metonymical profile shift. It became gradually established in LMJ as a syntactic complex predicate, spreading the usage to its transitive counterpart, *V-kak.e*. This analysis draws on Kageyama’s (1993) distinction between the lexical complex predicate (LCP) and the syntactic complex predicate (SCP), in which the former

is an idiosyncratic combination of predicates, reflecting their thematic meaning, while the latter is regular and productive, carrying a grammatical (or aspectual) meaning. LCPs, in addition, tends to obey the Transitivity Harmony Principle (THP), while SCPs are free from it (Kageyama, 1993). Kikuta (2008) assumes that the inchoative *V-kak.ar* grammaticalized into a SCP in LMJ, which was why the function extended across the transitivity difference to *V-kak.e*, which then swiftly overwhelmed the intransitive *V-kak.ar* during EModJ. The exact process of the extension, however, is not discussed, and the swift expansion of *V-kak.e* remains a conjecture.

The descriptive goal of this paper, therefore, is to critically assess the above scenario with a detailed examination of the data in LMJ and EModJ. The recent model proposed in Kageyama (2012, 2013) classifies the complex predicate into three types instead of two, with LCPs divided into two subtypes: the lexical thematic complex predicate (LTCP) and the lexical aspectual complex predicate (LACP). According to this new model, *V-kak.ar* and *V-kak.e* in LMJ (and in EModJ) ought to be defined as LACPs rather than as SCPs, which implies that they may have been constrained by THP to some degree (Kageyama 2013).

Examined from three perspectives, the data of the inchoative *V-kak.ar* and *V-kak.e* in LMJ reveal that they in fact followed THP, and the extension of the usage from the intransitive to the transitive proceeded by observing THP. While this analysis lends support to Kageyama's (2013) three-way model, it also suggests that LACP ought to be considered not as a homogeneous but as a gradient class, with more "lexical" and more "grammatical" members. As for EModJ, the data disprove the quick prevalence of *V-kak.e* over *V-kak.ar*: Both types grew in type and token frequencies, presenting functional overlap. This unexpected situation is interpreted as a case of "attraction" in

the sense of De Smet et al. (2018).

To analyze the findings in theoretical terms, constructional networks are proposed for the inchoatives in LMJ and EModJ. The networks involve the constructions of different schematicity with different levels of entrenchment. In LMJ, only the *V-kak.ar* construction was already entrenched, horizontally extending to the *V-kak.e* construction, and a more schematic superordinate *V-kak* construction gradually emerged, abstracting away from the two. In EModJ, on the other hand, all three constructions are sufficiently entrenched, and the attraction took place between the *V-kak.ar* and the *V-kak.e* constructions.